

近代化標識覚書

——近代化の原基指標——

児嶋正男

1. はじめに
2. 近代事象と近代化概念
3. 近代化原型の日本的展開
4. 近代化の原基指標
5. おわりに

1 はじめに

われわれがここ暫く強い関心をいだかされている日本の経営、あるいは日本の労務管理における特質の究明は、一つには欧米先進国に比べ足りないところ、異るところを見出すことに、また一つには西欧諸国とは全く異質の伝統社会のなかで、しかもきわめて能率的に機能する経営あるいは管理の仕組みの解明として行なわれるものであった。それはまた、われわれの研究がともすれば欧米の学問を移し植え焼きなおした学、いわば学々、——経済学学、経営学学——にとどまって自分の生まれ育ち、そこに根づいている社会の実態から、かけ離れている論理をあやつっているのではないかとの反省にももとづく。このような問題関心から、日本の経営に特徴的であると考えられる、経営家族主義について若干の考察を試みようなどとしたのであるが、そこでまず第一にぶかったのが日本の近代化の問題であった。

近代化の問題は、もともと日本にもっとも喫緊に発して、今日では非西欧國中唯一の「近代国家」となりおおせたことにおいて、既にして「先進浮揚」をなしたという点で、日本は世界のモデル国であるともいえる。ところがこのモデル日本のなしとげた近代化とはいかなるものか、西欧化することなのか、産業化することなのかさらには資本主義化することなのか。はたまた、その西欧化とは宗教、風俗習慣、如何に西欧化するのか、産業化とは機械装置、労働の組織、経営のイデオロギー、準則、何がどうなるのか。かく考えてみれば、近代化という言い方は、包括的できわめて便利のよい言葉ではあるが、それだけに仕末におえないあいまいな内容を含んでいる。

また、近代化という語、われわれは一つの進歩、なにがしかの改善の実現を含意していると思っていたが、この頃ではそうばかりではない。「近代化に泣く農民」などという大みいだしが新聞にかかげられ、減反と過疎になやむ老農婦のことが書かれている。

とすると、近代化ということ、まずは常識的に、ついでわれわれなりに、少なくともそこを出発点としうる原標をみいだしておかねばなるまい。すっかり整った道筋をみいだすことは、十分な資料と時間のない只今の間には合わないが、さし当っての起点をさぐっておくこととしよう。

2 近代事象と近代化概念

近代化という言葉がいかなる概念を表わすかということ、それはきわめてあいまいであり、また年代とともに変わるものであるとされる。すでに近代なる時代区分そのものが後からいわれることであり、自らを近代に包括せられるところに在ると考える場合にも、なおそこから見る近代は、以前にみとられた近代とは変らざるをえまい。近代化を云々するとき、誰しもがまず、近代化の概念が甚だ不明確であることをしらされる。われわれが常識的に近代化とばくぜんと言っていたことを明確にしようとするとき、それを適確にさぐりがたいというだけでない。過去において「近代」についての重要な要因であるとされていた概念自体、それが近代化のみに実際に有効な指標であるかどうか、改めて検証してみれば多分の疑問が生じることになる。逆にいえば、人間の歴史のなかで、ひとびとは近代まで全く平板に過し来つて、突然に近代に変異したのではない。例えば「近代化概念」としてかなり共通に把握される、目的達成のための合理的方法の適用の問題にしても、その目的というのはきわめて多様であり、また、そのような「近代化」——合理化——は古くから何処にもあるといえる。ここで大切なことは、近代において、何らかの目的が人びとにはっきりと意識され、その達成の方向へと、もはや後戻りすることなく、人びとはそのエネルギーを意識的に注ぎはじめたことである。ともかくも、近代化ということが考えられるには、近代という現実の歴史において、そこに何らかのきわだってみられる事象の存在があるからにちがいない。それをどのようにみ、その特質をどうとらえたかは別として、その存在が前提となる。

「近代化という言葉で、われわれが表現しようとしたり、また理解しようとする実体が何であれ、それは最近の数世紀にはじめて現実の世界に生起した事象である。この事象に名称を付与することは可能であり、かつ必要であるとの確信は、この現象が世界史のうえで新しい、独特のものであるとの前提にもとづく。¹⁾」のである。最近の数世紀内にこの現実の社会に生じ、それ以前にみられなかった、きわだった変化、まずは、それが把握されなければならない。

ジョン・W・ホール氏は、一般に社会変化における現象的な傾向について、一致してみら

1) ジョンW・ホール、「日本近代化にかんする概念の変遷」、M・B・ジャンセン編、細谷千博編訳『日本における近代化の問題』岩波書店、昭和43年、13ページ。

れる特徴として、つぎのような諸点をあげられる。²⁾ ① 時の経過とともに社会はますます複雑化し、機能が分化する現象が普遍的に生じること。② 社会はその技術的装備を改善し、人的資源、天然資源の利用を高めること。③ 全体の政治的・経済的・知的生活への大衆の参加の量を拡大してゆくこと。そして、④ 人間社会が物的社会的環境への合理的統御を合目的的に達成する手段を獲得するにつれて、合理化の過程は加速度を増す傾向がある。

このような社会変化の傾向を示す具体的な指標は、つぎのように示される。

- 1 都市への人口の比較的高度の集中と、社会全体の都市中心の傾向の増大。
- 2 無生物的エネルギーの、比較的高度の使用、商品の広汎な流通、およびサービス機関の発達。
- 3 社会の成員の、広汎な横断的接触、経済、政治問題への参与の拡大。
- 4 環境にたいする個人の非宗教的態度の拡大と、科学的志向の増大、それにとともなって進む、読み書き能力の普及。
- 5 外延的・内包的に発達した、マスコミのネットワーク。
- 6 政府・流通機構・生産機構のごとき、大規模な社会諸施設の存在と、これら施設が次第に官僚制的に組織化されてゆく傾向。
- 7 大きな人口集団が、次第に単一の統制（国家）のもとに統合され、このような単位相互作用（国際関係）が次第に増大する。

○追加、共同体的な社会集団の広汎な崩壊と、その結果、個人に可能となる社会的移動範囲の拡大と、社会における個人の活動範囲の、一層の広汎な多様化。³⁾

このような諸指標は人間の生活環境の合理的整備と統御の拡大が進められているのだからことができ、人間がより自然のままにいて、環境に支配されている状態から次第にそれを克服してゆく過程に、一般的に表われる諸事象であるといえる。したがって近代化をいうならば、それがきわだって、どうしてそのようにもたらされたかの、諸目的、諸要因が問題にされなければならない。近代化の具現、それは前近代社会のしくみのうち、どの部分がどのように変わることによって遂げられることになったのであろうか。

近代化は何よりも生産力の飛躍的増強に発する。生産力の増強は、生産技術の発展におうものであり、それは産業化とりわけ工業化によって達成せられる。近代化は、まず何よりも、産業化、工業化、技術化と把握される。たしかに、さきにみられるような諸指標は、今日の工業化された社会にみられるところである。

近代化を工業化であるとする代表的見解を示すものとして、中山伊知郎氏の説をきくこととしよう。

2) ジョンW・ホール、前掲稿29～30ページ。

3) ジョンW・ホール、前掲稿15～23ページ。

「近代化の広汎な地盤は、工業化によって与えられたものであり、工業化ということは、その解釈のしかたによってはそのまま近代化と読みとってよいほどの中身をもっている⁴⁾」そして、一般に工業化の起こりは、十八世紀後半のイギリス産業革命にあるとされ、機械制生産による大工業の生成発展が、世界の経済や社会を根本的に変えてゆくことになったとする。工業化はやがて次第に全世界に及ぶのであるが、この「全面的な工業化の波を生み出したもっとも大きな原動力は、突きつめていえば、工業化のもっている能率の原理、ということに帰着するでしょう。機械による生産の強さ、といってもさしつかえありません。そのような生産のしかたが、利益ばかりを生み出すものでないことはいうまでもありません。むしろ現代の問題は機械によって見失われた人間の再発見にあるのだという意味で、工業化の文明には強い批判が加えられていることもよく知られています。……しかし少なくともここ当分のあいだ、人間の知恵では工業化というやり方以外に、人間の生活物資を大量に生産する方法は見つかりません。経済が福祉とか厚生とかを最後の目的にするかぎり、その手段を整える第一前提として、工業化は必然の道となってきます。⁵⁾」といわれる。さらにそれが全世界的であるということは、資本主義とか、社会主義とかの体制の相違を越え、またその超克のかけ橋にさえなりうるのだとされる。

「工業化という巨大な、また全面的な変革に対して、資本主義と社会主義との区別が、いわば、目標に対する道筋のちがいだということを理解することはたいせつです。

第一には、両者の対立が絶対的なものでも、比較の可能なものでもないということを教えてくれるからです。資本主義と社会主義との対立は、イデオロギーの対立で、その対立には橋をかける手段はまったくないもののように考えられてきました。しかし両者が共に、工業化という大きな舞台の上での相違だということに気がつけば、絶対的な対立は相対的な対立に変わるでしょう。そしてそこには、少なくとも経済的な考え方に関するかぎり、一つの世界の可能性が生まれてくるというものです。

それだけではありません。こうしたものの考え方は、わたしたちの経済や社会に対する視野を広げるうえで、大きな役割をしてくれます。工業化の波を大きくとらえることは、資本主義や社会主義の、従来のとらわれたものの見方からわたしたちを解放してくれます。そうした固定観念を離れて、虚心にものを見ることの必要性が、今日ではますます大きくなってきています。⁶⁾」

近代化は物の面と人間関係の面という二つの側面からとらえられ、物の面の合理化、能率が前提となるとされる中山伊知郎氏の見解は、このように近代化＝工業化ととらえ、それはまた体制にはかかわりないものとされる。しかし、近代化は近代ということ数百年の間に

4) 中山伊知郎、『日本の近代化』、講談社、昭和40年、46ページ。

5) 中山伊知郎、前掲書、56ページ。

6) 中山伊知郎、前掲書、60～61ページ。

生じた世界史の現実の事象のなかでとらえられることであり、そのとらえ方は全く体制にかわりなくてよいかどうかは疑問である。第一に近代は封建制社会から資本制社会への移行の過程をふくんでおり、工業化の進展も、それをふまえる基本的な変革によって遂げられたのではなかろうか。第二に工業化が社会主義体制、資本主義体制を超えるものであり、その体制克服のかけはしともなるものだとするが、それは如何なる過程を経てそうなるのであろうか。またさしあたって、異なる体制下における工業化は、どのように共通であり、どのように異っているのであろうか。ともあれ、近代化は、焦点を労働手段にあてるとき、そこにおきた大きな変動は工業化と呼びうるものであり、「近代化」すなわち「工業化」ととらえられるであろう。しかし、そこにはもっとも大きい主体部分、目的部分が欠落させられているように思える。

近代化指標を工業化に求める中山氏の見解は、体制的・歴史的考察を欠き、技術的視点に偏重した一面的理解であるとし、近代社会と現代社会を峻別して近代化の歴史課題をとらえなおさなければならないと主張する、山田一郎氏は、近代社会について、またその諸標識について、つぎのように見解をのべられる。

「近代社会は、歴史的区分として、中世の封建社会の後に生まれた人類社会の発展形態であり、それはルネッサンスと宗教改革を契機として16世紀以来徐々に開始され、封建的な中世社会を根本的にくつがえした市民革命によって成立したものである。そして、この近代社会は、その主体者が市民階級（ブルジョアジー）であるという意味で市民社会（civil society）、その社会経済体制が資本主義経済体制であるがゆえに資本主義社会（capitalistic society）ともいわれ、西欧先進諸国においては、約200年、その準備的な萌芽の時期を加えると約300年の歴史的過程に該当する。

ところで、近代社会のそれに先行する前近代、とりわけ中世封建社会から自らを区別する諸標識としては、以下のごとき事項が指摘されるのであるが、まず最も特徴的なことは『個人』というものを発見、確立し、この次元における人間を身分的・地域的事物から解放して資本主義経済体制の成立を可能ならしめる基礎条件を整え、資本主義経済体制の確立によって、たとえ形式的にもせよ、合理的思考（マックス・ウェーバーのいう『合理的資本計算』）を生んだことである。その意味での近代人のイメージは『経済人』（homo economicus）の確立であった。……近代社会の諸標識を列挙すれば、以下のとおりである。

- (1) 『個』の発見と個人主義の確立——個人が集団に優先する。
- (2) 人間の解放（前述のとおり）
- (3) 基本的人権の尊重と、平等主義（たとえ法律的・形式的であったにせよ）
- (4) 民主主義（市民的・ブルジョア的デモクラシーを意味するにすぎないものであったが）
- (5) 自由主義（個の確立を前提とし、放任 *laissez-faire* を主軸とする自由主義。これ

も限定された市民的・形式的自由にすぎなかったけれども)

- (6) 産業革命を媒介とする「企業」の成立と資本主義経済体制への移行・確立
- (7) 領民から国民(nation)への転移と国民国家ならびに国民市場の形成
- (8) エネルギー革命(石炭の使用を媒介とする手工業から作業の機械化の実現)

山田氏は以上の諸標識によって表徴される自由資本主義ないし産業資本主義時代(資本主義前期)をもって、歴史的時代区分としての近代ないし近代社会とし、その諸標識に示される内容の社会にすることが、まさしく近代化の意味であるという。そして近代社会はそれに先行する社会に比べ、より人間の自由を実現し、その次元における人間を開放したにもかかわらず、その経済体制である資本主義経済体制は、所有者と非所有者の階級分裂を生じ、非所有者の所有疎外に端を発する人間疎外を招来し、ために、近代社会のもっとも特徴的な指標であった十全な意味での人間の自由は死滅したとする。近代の終焉をもたらした現代社会は、近代社会のよい面や貴重な遺産を発展的に継承しながら、その結果である諸欠陥を揚棄しつつ、また近代社会の経験しなかった新らたなる問題の解決にせまられることとなり、もはや近代化ではなく、むしろ近代なるものを克服する現代の課題を担うものであるとされる。

山田氏の所説は、近代化を産業化・工業化、ないしは技術化と把える説を排し、近代社会をそれに先行する前近代、すなわち封建社会と区別する、体制区分の標識をとらえることによって果そうとされている。それは何よりも個人の確立であり、自由な個人の確立をめざす体制として資本主義経済体制の成立がとらえられ、その基礎条件となる諸指標を近代社会の諸標識としてあげている。したがって、それは一見、近代化即資本主義化と理解させられる。近代化を産業化・工業化、あるいは技術化と把える把え方が、積極的に体制をこえるものとして主張されているのであったが、ここでは逆に、近代化を資本主義体制に独自のものとして把え、それ故に、さらに資本主義体制において実現されえないとする人間の自由の獲得を、「現代化」による、近代化の克服として把えなければならないとされる。近代化を単に工業化と把えることによって解明しがたいとする批判は、近代化を資本主義化と把えることによって答えられるとされるのであった。しかし近代化を資本主義化と把えることは、それを克服するための現代化なる概念の導入が必要であるとの主張に変転しなければならない。それは近代化すなわち工業化の批判となるよりは、挙げられた標識が近代において十全に達しえなかったことをいうにある。

手段に着目するか、目的に着目するかで、近代における事象のなかから「近代化」なる概念が大きく二つに別かたれうることは理解しえたが、目的と手段が互いにどのようにかかわり合うのかは、これだけでは明らかでない。また、近代化という場合、かかげられた生のそのままの諸標識によって示されている内容の社会と化することをもって近代化というのであろうか。あるいはまた、一つの類型としてうちだされた、経済人なるものに生身の人間が変

身することによって、自由なる個人は実現しうるのであろうか。歴史のある時代を把握、よくも悪くも、そのような内容をそなえる社会と化そうとするようなことは、非論理的非実践的ではあるまいか。そしてまた近代が現代只今に先き立つことはたしかであるが、近代は終焉し、近代を死滅させた現代には、「近代を超克する現代」のみが行なわれるべきであるのだろうか。われわれが近代化という場合の近代にみいだした事象は、そこに萌芽を有しながらも、未だ十全に果しえなかった課題としてとらえたのではなかったか。そこにひとそれぞれの理想を結像させ、その実現を自らの現世に克ちとろうとしているのではないだろうか。それ故に、体制とかわり、体制を超えて実現がはかられねばならないのであり、それ故に近代化は現代を超克するものであらねばならないのではあるまいか。

このように考えるとき、近代化は何よりも日本に喫緊のことであったし、近代化における目的と手段のかかわりあい、日本の近代化実践のなかに、その原型となるものがみいだされるのではあるまいか、簡単にその系譜をたどってみよう。

3 近代化原型の日本的展開

ところで近代化なる言葉自体、きわめて日本的なものであり、⁷⁾ それも古くから用いられた言葉ではないように思える。日本の先覚者たちが、はじめて同時代の西欧について識り、驚き、西欧諸国の近代における発展の基礎が何であるかを求め、模倣しようとしたものは、文明であり、そのような需めは文明化であり、開化であった。そのときから、西欧モデルに追いつき追い越すことを目標として、日本に独自の施策と実践が追求されたのであったが、それはまた西欧文明が西欧に尽き、西欧のその時代に終わるものでないものとして把握されていた。しかしこの近代化に先立つ文明開化よりして、その推進のあり方は、きわめて後進的、日本的、選択を余儀なくされざるをえなかったということが出来る。

従来の被支配階級が自らの力を広汎に結集し、新たな国民国家をつくったのではなく、一つには自生する民衆エネルギーによる封建権力のまひと、一つには欧米列強の外からの強制による高圧的な条約のもとでの日本の民族的危機に乗じて成った明治維新は、直ちに日本の半植民地的地位を変化せしめ、国家的、民族的独立を完全にうちたてたものではなかった。このような状況下において、明治の先覚者たちは、文明の本質を識りながらも、開化の実をどのようにあげるかには、緊急の過程的目標として「自国独立」をあげざるをえなかった。

文明を野蛮半開と別かって、「天地間の事物を規則の内に籠絡すれども、其内に在て自から活動を逞ふし、人の気風快発にして旧慣に惑溺せず、身躬ら其身を支配して他の恩威に依

7) 「日本がこの百年間目標としモデルとしてきた西欧諸国には、近代化(modernization)という言葉はこれまで存在しなかった。それはやっと最近になってアメリカ人によって使われた言葉であるようにみえる。」、高島善哉、「近代化とは何か」、高島善哉編、『近代化の社会経済理論』、新評論社、昭和43年、9ページ。

頼せず、躬から智を研ぎ、古を慕はず今を足れりとせず、小安に安んぜずして未来の大成を謀り、進て退かず、達して止まらず、学問の道は虚ならずして発明の基を開き、工場の業は日に盛んにして幸福の源を深くし、人智は既に今日に用いて其幾分を余し、以って後日の謀を為すものの如し。これを今日の文明と云う。野蛮半開の有様を去ること遠しと云ふ可し。⁸⁾」とし、封建的隷属から解き放されて人びとが自主独立を克ちとり、高い智徳をもつとともに、大いに生産が延ばされんことが第一に主張されてはいる。ところが、その人民同権の実現となると、国内における人民相互の問題より対外独立国の形成を優先さねばならなかつた。

「抑も外人の我国に来るは日尚浅し。且今日に至るまで我に著しき大害を加えて我面目を奪ふたることもあらざれば、人民の心に感ずるもの少なしと雖ども、尚も国を憂るの赤心あらん者は、聞見を博くして世界古今の事跡を察せざる可からず。今の亜米利加は元と誰の国なるや。其国の主人たる『インデヤン』は、白人のために逐はれて、主客処を異にしたるに非ずや。故に今の亜米利加の文明は白人の文明なり、亜米利加の文明と云う可らず。此他東洋の国々及び大洋諸島の有様は如何ん、欧人の触るる処によく其本国の権義と利益とを全うして真の独立を保つものありや。『ペルシャ』は如何ん、印度は如何ん、^{しやむ}暹羅は如何ん、^{るそんじやわ}呂宋呱哇は如何ん。『サンドウキチ』島は千七百八十八年英の『カピタン・コック』の発見せし所にて、其開化は近傍の諸島に比して最も速なるものと称せり。然るに発見のとき人口三、四十万なりしもの千八百二十三年に至て僅かに十四万口を残したりと云ふ。五十年の間に人口の減少すること大凡そ毎年百分の八なり。……欧人の觸るゝ所は恰も土地の生力を絶ち、草も木も其成長を遂ること能はず。甚しきは其人種を^{ひとだねつく}殲すに至るものあり。是等の事跡を明にして、我日本も東洋の一国たるを知らば、假令ひ今日に至るまで外国交際に付き甚しき害を蒙りたることなきも、後日の禍は恐れざる可らず。

……全国人民の間に一片の獨立心あらざれば文明も我国の用を為さず、之を日本の文明と名く可らざるなり。地理学に於ては土地山川を以って国と名れども、余輩の論ずる所にては土地と人民を併せて之を国と名け、其国の獨立と云い其国の文明と云ふは、其人民相集て自から其国を保護し、自から其権義と面目とを全ふするものを指して名を下だすなり。⁹⁾」

こうして、文明を進めるには、目的を定めて進めなければならず、その目的とは国の獨立であり、国民の文明は此目的に達する術であるとする。もちろん、「人類の約束」は自国の獨立のみを目的とするものでなく、より高遠なものであるが、さしあたっては「自国の獨立」を以て文明の目的とせざるをえない。「故に此議論は今の世界の有様を察して、今の日本のためを謀り、今の日本の急に應じて説き出したるものなれば、固より永遠微妙の奥蘊に非

8) 福沢諭吉『文明論の概略』、『福沢諭吉全集』第4巻、岩波書店、昭和34年、17ページ。

9) 前掲『福沢諭吉全集』第4巻、202～203ページ。

ず。学者遽に之を見て文明の本旨を誤解し、之を軽蔑視して其字義の面目を辱しむる勿れ。¹⁰⁾とし、まづ事の初歩として「自国独立」をはかり、その他は第二歩として他日為すところあらんとするのである。

列強の外圧のなかで進められねばならなかった日本の「自国独立」は、なかなか国民の自由独立と平等という第二歩に進められることにはならなかった。「自国独立」はやがて富国強兵」のスローガンによって国民ではなく臣民へと転位せられ、それは従来の支配秩序を温存したままの「殖産興業」によって達成が図られる態のものであった。この間世界をおおる資本制生産方式は容赦なく進められ、それは日本にもっとも機敏に、かつ機能的に取り入れられた。後進国の殖産興業それは強兵のための軍需工業であり、富国のための輸出軽工業であったが、商品生産化がきびしく押し進められるなかで古い体制は決して全面的に解体されることなく、零細過度労働によって支えられ、しかも完全にそれを離れ去っては生計が立ちゆかない仕組みの中に生きてゆかねばならない出稼労働力をもっとも有効に組織し、家父長的秩序によって資本合理的に運営される興業の方策によってであった。

富国強兵、殖産興業、それには国内における平等な民権の確立、諸個人の自立の必要はなかった。自由、平等、博愛、などに遙かに先んじて大切なもの、それは忠君愛国であり義勇奉公であった。個人主義は自利主義として否定され、大は天皇制支配による国家への奉公・忠節を、小は家父長支配による上長への奉仕、孝行を規範として、「家」の秩序による統治が、一貫して社会生活のすべてを支配しているのであった。

日本に欠けている新しい技術や生産方式を導入して、いちはやくその運営手法を身につけ、場合によるとそれを生んだ国でよりも、もっとすぐれて手ぎわよく効果あるものに更改する術をみ出すのであったが、社会における人間関係、支配の機構は、できるだけ旧態を保つことによって統治しようとするのが、日本の政治であり、それを守るものが日本の文化であった。それは文明というシビルなものとは基本的な距りがあり、しかも、伝統的な旧幹に接ぎ生かされるにしたがって、もと西欧に生じたものとは異った、日本的かたよりのままに成長し、「自国独立」は果されたが、それは通常の近代国家とは異なる、多分に歪をもった「大日本帝国」として形成されたのであった。

文明開化の挫折がこのようにしてあったとすれば、それを引き継いで新たに近代化という名によって行なわれる開化の指向するところは、「自国独立」に急であって、ついに果たすことを得ず残された根本義であらねばならない。既にみたように「自国独立」のための手段となったものこそ、産業化であり、資本制生産社会化であった。しかし、それはそれなりに成功したものの、ひたすらに自立諸個人の豊かな確立を次第に強固にするに役立つ基礎がつけられたとはいいい難い。その点では成功よりもより多くの齟齬が目につくのであり、日々の生活

10) 前掲『福沢諭吉全集』第4巻、208ページ。

のうちに自らを自らの手中におくことなく疎外のなげきをかこたねばならないのであった。

近代の生成のなかにみいだし、それを現実のものにしようとした理想像、未だ歪められることのないままの原基指標、それこそが今や求めなおされねばならないのである。

4 近代化の原基指標

文明開化、あるいは近代化によって達せられることが願われたのは何よりも「身躬ら其身を支配する」ことであつた。近代と前近代の基本的相異、それは様々に列挙された近代の諸事象の奥にみられる人間主体のあり方にみいだされる。歴史のなかで進歩と把えられることは、それが人間に役立つことであらねばならず、人間とは、生身の生きた人間であり、飲み食い、働き、笑い、哀しみなどする、人びとである。人びとがよりよく生きることは、一つには人びとがそこから生じた自然に対してであり、また一つには共にあらねばならぬ人びとの関係においてである。

人間はこの自然との間での発展をとげ、それは人間相互間の発展を同時に生み出すものであつた。人間の自然への働きかけ、それは人間を動物と区分するもっとも基本的なものであろうが、人間の生活のなかで、そのことを、人びとのそれぞれが自らのものとしようとしはじめたのは、人間の歴史のなかできわめて新しい。近代とはまさに、このような現象がきわだって出はじめ、人びとが自らの働きをわがものとするを現世の中に、もはや失なわれることなく根づく制度としてうち建てようとする過程を、それ以前とは画期的なものとして区分するところに名づけられたものではなからうか。そしてそこに生起してまさに芽を出そうとしているものを指し示し、人びとがそれを識ることがなければ、歴史の発展のなかで、人びとは自らがどのように法則的に組み込まれ、どのように自らにもたらずかを、明らかにすることはできない。理想の設定と、それを歴史のなかに間違いなく招来することへの法則理解、起点は同時に帰結点を示すものとして、人間解放の基本原理の提示をもっとも早くより適確に述べているのは、まさしく後進国出身のマルクスにはかなるまい。

人間の解放の歴史は、自然から解放され自然に対する制御を高めてゆくとともに人間相互の関係をも変えてゆく。人間の全面的解放は自然からの解放が高度に達せられるとともに人間相互の関係においても支配従属の関係が克服されることにある。

歴史のなかで人びとが広汎に自立の可能性を持ちえて、従来の人間関係を桎梏と考え、その解体をすすめることがはかられるのは資本主義社会への、それに先立つ社会からの移行においてである。西欧においては、それは封建制社会から資本主義社会への移行の過程にみられるところであろう。封建制社会の体制を支える諸制度は、新しい生産力を支える柱とはなりえず、そこに拘束され、それに抛らねば成り立たない生活の共同体が、もはや発展の障害をなすことになると、人びとはそのような生産形態を支える諸制度から脱するため、それに

立ち向って古い制度をうち壊し、新しい制度を形成する。この共同体に 対立して生じたもの、それがまさに私的諸個人である。したがって近代を画する人間的基本事項とは、人間の人びととしての分割自立であり、それを基とする新たな共闘生産生活体の再形成である。私的諸個人の存立は共同体所有の解体にかかる。「共同体とそれを拠点とする所有とは、つきつめて行くと、働らく主体という生産力の具体的開発段階に帰着させることができる。これに、働らく主体相互間および労働主体対自然の特定関係が対応する。一定の点までは、その再生産がみられ、そののちは解体へと移って行く。……したがって、所有とは、もともと働らく（生産する）主体（すなわち自分自身を再生産する主体）が、自分のものである生産条件あるいは再生産条件に対する関係を意味するのである。¹¹⁾」

ところが一方で解体を進める基盤は一方で新たな建設の契機をなすものであるが、人びとの個別化は類的存在を前提としてのみ拡大する。人びとは共同社会へ結びつく一定の条件のもとで所有者であるが、働く所有者は、自らが働いている 拠りどころとの関係をも解体する。生きている労働能力＝労働者そのものを客体的生産条件として領有される関係—奴隸的農奴的關係—を解体するが、こうして客体をもたない、純粋に主体的な自由な労働者となる時、客体的労働条件は既に自分のものではなくなり、誰か他人の所有するものであり、しかも直接に領有されるのではなく交換を通じて間接的に領有されることになる。ブルジョア社会では、このように自由な労働者は、客体をもたない純粋に主体的な実存である。「しかしかれに 対立する事物は、まぎれもない共同体となっており、かれはこれを食いつくそうとし、しかもそれによって食いつくされるのである。¹²⁾」

共同体からの私的諸個人の独立は、働く所有者を解放し、自由な労働者に転化させるが、自由な労働者の創出は、ただ単にその人びとの従来の収入源泉、所有条件がなくなることによってではない。その使い方、あり方の変更によってである。諸個人が自由な労働者に転化される過程は、従来諸個人が客体的労働条件にむすびつけられていた紐帯から潜在的に解放される過程であるが、これらの客体的労働条件（土地、原料、生活資料、労働用具、金銭あるいはその全部から成る）はまだ現存する。自由な元本として。生きた労働が生産に必要とする客体的労働条件を、自由な元本と、形態を変えしめる。「そこでは一切の古い政治的その他の関係が抹消され、かつまた労働条件から切離されて無産者となった人びとに対しては、たんに価値の形態で、自らを主張する価値の形態で対立するのである。自由な働らく人びとの一団を客体的労働条件に対置する同じ過程が、またこれらの条件を資本としてかれらに対置するのである。この歴史的過程は、それまでは結合していた諸要素をそれぞれに分

11) マルクス、市川泰治郎訳、「資本制生産に先行する諸形態」E. J. ホブズボーム、市川泰治郎訳『共同体の経済構造』未来社、昭和44年、140ページ。

12) マルクス、同、前掲書、142ページ。

離する過程である。したがって、その結果は、これらの一つが消滅するのではなく、その要素のおのおのが相手に対して否定的な、すなわち一方では（潜在的に）自由な働らく人びと他方では（潜在的な）資本が対立するという関係をもつにいたる状況が生まれるのである。¹³⁾ 直接的消費を本来とする生産の優位、使用価値優位の前提をなす、以前の共同体の優位は解体し、交換を基礎とする生産、交換価値の交換を基礎とする新しい共同体へと移行する。

「交換のための生産と交換に基礎をおく共同体とは、所有をまったく労働からのみ得られたものと定め、自分の労働の生産物における私有が先行条件だと断定するものであるようにみえるかも知れないが、それはそうみえるだけで、事實はちがう。等価交換は生産の表写層で（しかもそこだけで）発生する。生産の真髓は交換なしに、ただ交換を隠れ蓑にして他人の労働を領有することにある。このような交換制度は、資本をその基盤としている。¹⁴⁾」

このようにみると、人びとの独立自由の獲得は、人びと自らその労働を領有しそれを貫徹しぬくことにあり、諸個人のそれぞれの労働の領有が、同時に類的な連契によって成立するところにあると識るのであるが、そのような理想的状态が現実となりえたことは且つてない。「労働がもう一度、その客体的条件をその所有として掌握するためには、私的交換体制をほかの体制にとりかえなければならない。¹⁵⁾」

近代化が独立個人の確立であるとされることは、それはそのとおりであると思う。しかし人びとは歴史過程によって始めて個人となり、しかもそれは類的存在としてのみ叶えられる。人びとの自由なる個人としての確立は、人びとの労働から生まれ出づるものであり、人びとそれぞれに労働の客体的条件を躬自らのものとしなければ果されぬ。とすれば、近代化の原基指標は、まさに躬自らの労働の領有におかすべきではあるまいか。

5 お わ り に

近代化の指標を私的諸個人の確立におき、そのような視点から、日本の経営をみると、どのように日本の経営の特質が浮かび上るか何ほどかは、前号拙稿の「経営家族主義の再検討」において試みた。しかし、そのような個人の確立は、もっと端的にどのようにして遂げられるのであろうか。それは、生きてゆく人びとの生活の手段の確保、生産のあり方にかかわるのであろうが。実際に生産力と生産関係などということ、具体的なことを十分に理解した上で、図式に写しだすというのは、とてつもない難事業である。あるていどに公式を知っているということと、内容がわかっているということとは同一でない。自立の個人を近代化

13) マルクス、同、前掲書、154ページ。

14) マルクス、同、前掲書、165ページ。

15) マルクス、同、前掲書、166ページ。

児嶋：近代化標識覚書

の指標と考えることは、きわめて一般的合意が得られることであろうが、さてそれでは、近代において個人はどのように確立されてゆき、それがまたどのように疎外されてゆくかの仕組み、そのことが外ならぬ経済的仕組みによるものであると思うのだが、なかなか理解しえない。所有、分業にかかわることであり、つきつめていえば労働にかかわるのであると思いつつも適確にはとらえ難い。あれこれとメモを重ねているうちに、ともかくも、このように進展し、諸個人確立の基礎は、その労働の領有にあるとたどりついた。この覚書、理路整然として、確たるものに展開するために大方の御教示をお願いしたい。 (46. 10. 4)